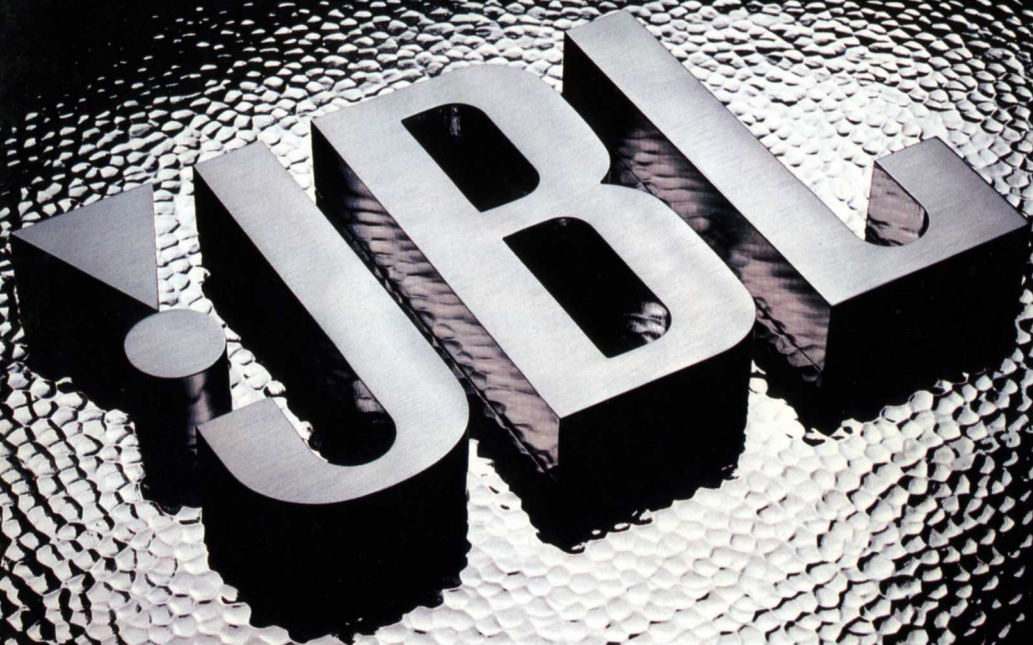


# Loudspeaker Systems & Components

J B L 総 合 カ タ ロ グ

A large, three-dimensional JBL logo is centered on a circular, textured surface that resembles a speaker grille. The letters are dark and cast shadows on the surface below them. The background is black, and the right side of the page is white.A small, red square logo with the white letters "JBL" inside, positioned in the bottom left corner of the page.



James B. Lansing

# JBL's History

1934年の秋、James B. Lansing は自分で創るプロ用スピーカー第1号機の最終工程を完了しました。現在、JBLサウンドとして高く評される原点が、その時誕生したのです。当時のアメリカはラジオの隆盛期を迎え、トーキー映画の黎明期でもありましたが、彼は「音をいかにシビアに再現するか」に関し天賦の才能をもち、それを具現化したのでした。いまもJBLスピーカーに採用されているリボン線エッジワイズ巻きボイスコイルや高能率コンプレッションドライバーなどは半世紀も前に完成、今なお斬新さを失っていません。彼の卓越したそれら技術の中に高い評価を得たJBLサウンドの源流をみる事ができます。

**D130の完成を機に飛躍を始めたJBLはシステムでも多くの不朽の名器を生んだ。**第2次世界大戦が終わって間もない'46年に彼は James B. Lansing 社を創立。そして翌年、彼はワイドレンジユニットの名器38cm径D130やD131、D208をつくりました。D130には10cm径エッジワイズ巻きボイスコイル、空気成型アルミセンタードーム、アルニコV使用の強力磁気回路など最先端をゆくテクノロジーを搭載、いまなおロングセラーを続けています。量感ある低音、透明な中高音はJBLサウンドの象徴として多くのオーディオファイルを魅了したためです。このワイドレンジの銘器D130などの誕生を機にJBLは飛躍を始めた。

'49年にJames B. Lansing が世を去った後も、彼の遺したクラフトマンシップはそのまま継承されました。同年にJBL最初のホームユースシステムD1004が誕生。そして'54年にはビル・ハーツフィールドが設計したD30085が完成、ライフ誌上で「究極の夢のスピーカー」と評され、JBLの名声を確認しました。ステレオLPの出現した'58年にはオールホーンのステレオスピーカー「パラゴン」が登場します。R.H.レイジャールが考案、A.ウォルフがデザインしたパラゴンは、20余年後の今でもJBLスピーカーの頂点に立つ不朽の名器です。とくに、木工の芸術品ともいえる優美なスタリングはJBLならではの手造りの魅力です。**LE8Tなどリニア・エフェシエンシーシリーズが'60年代サウンドをリードした。**JBLユニットには、精巧な技術から生まれたリング・ラジエーター075、「黄金の翼」といわれるホーンレンズ537-509 (HL89)

などが生まれました。しかし、JBLサウンドを最も明確に主張したのはLEシリーズでしょう。たとえば、LE175、LE85、LE8T、LE15A…とドライバーやウーファー、フルレンジのユニットの秀作機が続々と登場、そのサウンドが'60年代のオーディオ界をリードしました。これらは、単にJBLの製品というだけでなくオーディオ史に残るものとなっています。そして、システムの中にこれら秀作ユニットがマウントされ、ラインナップが一段と充実しました。組子格子が印象的なオリンパス、地中海産大理石のトッププレートを配したL101、L88 ノバ……。こうした系譜の中に、最新技術を搭載したL150AやL112などの新シリーズがあり現在も一貫したポリシーを踏襲しています。**苛酷な条件を求めるモニター機こそJBLの最も得意な分野であることの証明**C50SM。'62年につくられたこのシステムが現在のJBLスタジオモニターの原器で

そこて蓄積した高度なテクノロジーを具現化したのが'71年に発売した4320です。4300シリーズはその後、大きく進歩するレコーティング技術に対応して広帯域化、低歪化、広指向性などが行なわれ、発展を続け、世界のスタジオの基準音となっています。というのも、JBL モニタースピーカーは、歪の少ない透徹した音質はもちろん、大入力・高能率・広ダイナミックレンジなどプロが要求する厳しい音響特性を実現しているためです。たとえば4345。〈SFG〉磁気回路をもつ46cm口径ウーファーや歪を減少した25cm径ミッドウーファー、高能率ドライバー、超高音用ツイーターで構成、32Hz~20kHz ±3dBの広帯域を精緻に再生、原信号をあますところなく再現、スタジオなどでのプレイバックモニターとして活躍しています。また、'81年には斬新な2ウェイモニターシステム4400シリーズを完成させました。ユ

ニークな形状のバイラジアルホーンを搭載することで、よりシャープなステレオ音像やフラットなエネルギー特性を実現、4ウェイに匹敵する2ウェイ機となっています。**進歩するオーディオの流れの先を読む****卓越した技術力がJBLの歴史を拓く。**数々の名器を生んできたJBLですが、その基本にあるのはJames B. Lansing の独創性ある技術でした。そして、今、JBLはその伝統を受け継ぎ、日進月歩のオーディオ技術の一步先をゆく技術を開発しています。低歪率化した強力〈SFG〉磁気回路、ステレオ音像を追究した〈ミラー・イメージペア〉構成、そしてバイラジアルホーン……。これらは、スピーカーの歴史を切り拓くJBL技術のひとつのマイルストーンといえるでしょう。音に対して一切の妥協を許さないJBLクラフトマンシップは、きょうも新たなスピーカーの世界の創造を目標にJBLサウンドの研鑽を続けています。



